

レディ・Wilkinsonとナラティブ

別れの挨拶をして立ち去ろうとしたそのとき、彼女は最後に尻尾をひと振りして、私を引きとめた。

「本当に、こんなふうに私を置いて行ってしまわれるのですか？

次はいつお会いできるのでしょう。

ここに残って、私と話していってください。

後悔はさせません。

マギーの名にかけて」

私の休暇の計画は単純だった。

2日間。

翌日の晩には、飛行機でイタリアへ戻るはずだった。

だが、年老いた貴族のレディがロンドンから呼んでいる。半分カラブリアの血を引く私に、聞こえないふりなどできなかった。

「どれくらいの時間を、あなたに捧げればよろしいですか」

彼女は目を見開いた。

一瞬、聞き違えたかのような顔をした。

何か勘違いをしたかのような。

だが、違う。

話していたのは、本当に私だった。

そして彼女は、経験で武装し、一点の曇りもない思考に恵まれた英国の女性らしく、すぐさま好機を見てとった。

微笑んで、こう答えた。

「一生です」

世界のどこであれ、女が

「後悔はさせません」と言うとき、

それは、ひとつかそれ以上の驚きをすでに用意してあるという意味だ。

それは私が人生を通じて、多文化にまたがる経験のなかで学んだことだった。

私が出会った女たちは、決して数ではなかった。

ただ、私が属していた世界の起源だった。

ホテルに戻って、出発の予定が変わったと伝えよう。

彼女には5日あげよう。

差し出せるのは、せめてそれくらいだった。

ところが、私を行かせる前に、彼女はもう一度引きとめて言った。

「あなたが今、母と呼んでいる方は、私の友人なのです。

私たちは同じ戦争を戦いました。

やがて運命は私たちを別々の方角へ運んでいきましたが、どちらも、忘れることだけは自分に許しませんでした。

敬意は本物のまま残りました。

敬意はお互いのもののまま残りました」

それから彼女は、すでにいくつもの人生を生きてきた者の静かな確信をたたえて私を見つめ、すべてを変える言葉を、そっと口にした。

「ようこそ、甥よ」

フェルディナンド